翻刻・影印

『俚諺俳画賛絵巻』

――仙鶴画、周竹・園女・秋色・敬雨ら賛――

伊藤善隆

はじめに

新収となった俳画賛絵巻についての報告である。仙鶴が絵を描き、周竹、園女、秋色、敬雨ら、元禄期から享保期にかけて活躍した俳人たちが賛を記した作品である。成立の正確な年次は不明ながら、秋色が享保十年に没しているので、それ以前の成立であることは確実である。

内容は、俚諺（ことわざ）をテーマにしたユニークなもの。同様に俚諺を題とした絵俳書としては、享保十九年刊の『二重染』（露月ほか編）があるが、本作品はそれに先行する、しかも肉筆の絵巻である。つまり、制作時期、制作者、内容のいずれから見ても、貴重で興味深い資料と言えよう。

書誌

形態…巻子本一巻。二九・四糎×四〇六・三糎。

表紙…薄緑色絹表紙。

外題…なし（タイトルは内容による）。

見返し…金箔散らし料紙。

本紙…二八・八糎×三六五・七糎（料紙を三枚継いでおり、一枚目が二八・八糎×一三一・二糎、二枚目が二八・九糎×一三四・二糎、三枚目が二八・九糎×一〇〇・三糎。なお、二枚目と三枚目には、上記の長さに足して、それぞれ糊代が数糎ある）。

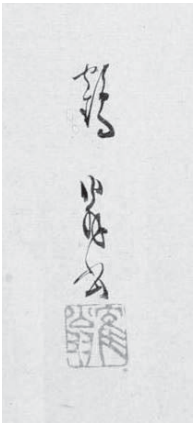
『早稲田大学図書館紀要』第六十三号（二〇一六年三月）

年記…なし。

請求記号…へ五　六七〇五。

内容

全十二図で構成される。巻末に「鶴翁書［雀翁］（朱文方印）」とあって、画者は堀内仙鶴であると判る。絵は、いっけん何が描かれているのか判りにくいものが多いが、いずれも俚諺を絵画化したものである。以下、それぞれの図ごとに、賛を翻刻し、描かれた俚諺とその解説を※印に続けて記した。なお、俚諺の検索には、加藤定彦・外村展子共編『俚諺大成』（日本書誌学大系59、青裳堂書店、昭和六十四年一月）を主に参照した。

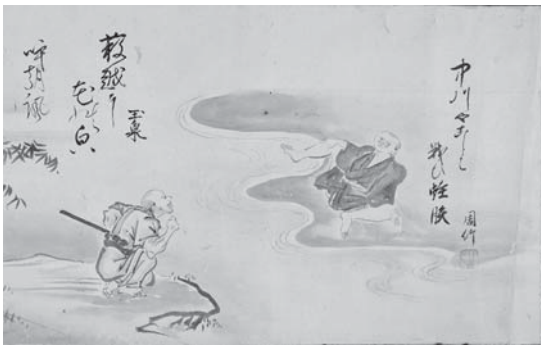


（巻末、落款部分）

（第一図）

中川やことば戦ひ蛙股　　周竹［□治］

※川向いの喧嘩…自分の心身に少しも痛みを感じないこと。「船と陸との詞戦ひ、俗にいふ川向ひの喧嘩に等しく」（『壇浦兜軍記』）、「河向の喧嘩」（『二重染』）。



（第二図）

藪越に花の呉呼朝諷　　玉泉

※藪から棒…突然であるさま。「藪から棒と申さうか、寝耳に水と申さうか」（『鑓の権三重帷子』）、「藪から棒」（『二重染』）。



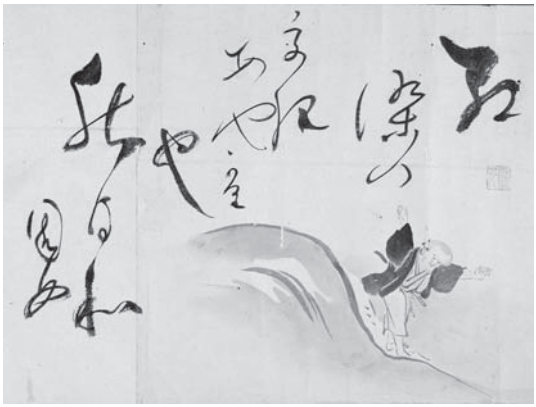
（第三図）

探よる垣に鼻こそ梅屋しき　　夏葉

※盲の垣覗き…やっても無駄なこと。「花あれば誰もめくらか垣のぞき　親重」（『犬子集』）、「目くらの垣のぞき　歯なしの骨だくみ　法師の椹だくみ」（『毛吹草』）、「瞽垣覗」（『二重染』）。



（第四図）



紅染のうきあやかりや此日和　　園女［園女］

※我事と下り坂に走らぬものはない…下り坂では自然に走り出すように、自分に関係したことでは、誰に指示されずとも乗り気になること。

（第五図）



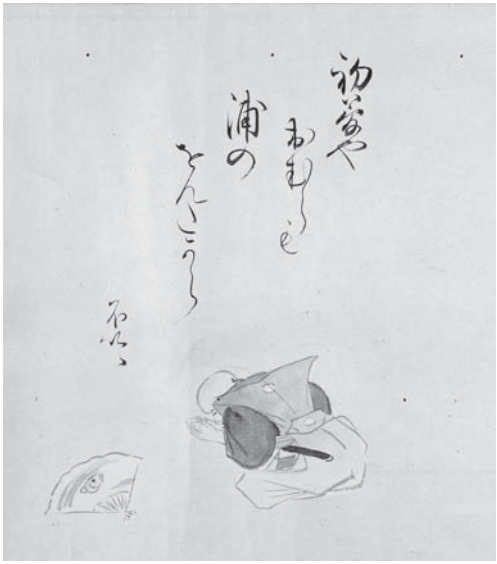
恋と申からき物あり小夜千鳥　　秋色

※焼鳥に捉緒をつけよ…用心の上にも用心をせよ。念には念を入れよということ。「かちてかぶとのをゝしめよ　やきとりにもへをゝつけよ」（『毛吹草』）、「やきとりにへを」（『二重染』）。

（第六図）

初夢やほむらも浦のをんたから　　不吟

※鰯の頭も信心から…鰯の頭のような詰まらないものでも、それを信仰する人にとっては大事だということ。「いわしのかしらもしんじんから」（『毛吹草』）、「いわしの頭も信心から」（『二重染』）。



（第七図）

鉄むちや朝日もまたず霜ばしら　　不吟

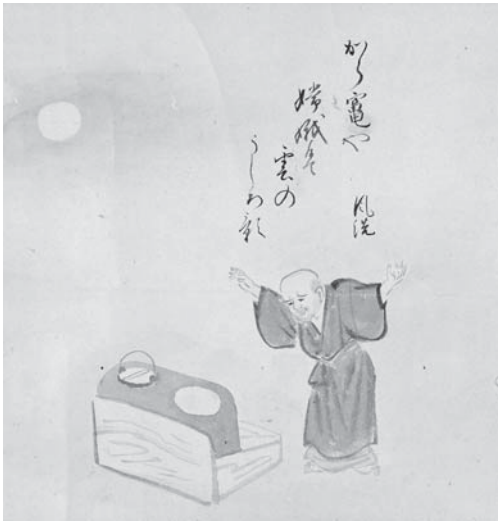
※鬼が煎餅かむ様…物が簡単に壊れてしまう様子。ひとたまりもない様子。「風に木の葉、鬼に煎餅、めりめりびしゃり粉微塵と」（『平仮名盛衰記』）。



（第八図）

から竈や嫦娥は雲のうしろ影　　風洗

※月夜に釜…明るい月夜に釜を盗まれるということから、油断してひどい目に遭うこと。「身の一大事をわすれ、いつも月夜に釜をぬかれ」（『西鶴織留』）、「月夜の釜」（『二重染』）。



（第九図）

十面の具足もさむきわらやかな　　鬼丸

※暗がりの渋面…暗闇の中で顰め面をしても相手が気付かないということから、いくらやっても全く反応がないこと。「闇かりの皺面」（『二重染』）。



（第十図）



筍の隣をのぞく橡の下　　秋色

※縁の下の力持ち…人のために、陰で苦労や努力をすること、また、そのような人。「橡の下の力持」（『二重染』）。

（第十一図）



木に竹をつぐや見越の花ばさみ　　見草

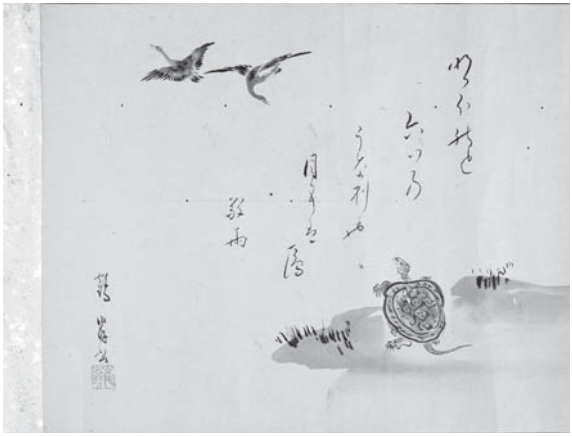
※木に竹を接ぐ…違う性質のものを継ぐことから、筋が通らないこと、釣り合わないこと。「木にたけをつぐごとし」（『毛吹草』）、「木に竹をつぐ」（『二重染』）。

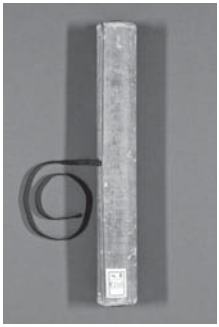
（第十二図）

明ぼのと六つのうなりや月に鳫　　敬雨

※雁が飛べば石亀も地団駄…自分の分際を忘れ、他の真似をしようとすること。「いりまめのすましろひ　鳫がとべばいしがめもちだんだ」（『毛吹草』）、「鳫かとべは洞亀もじだんだといひ伝たり」（『類船集』）、「雁がとべばいしがめもちだんだ」（『二重染』）。

鶴翁書［雀翁］





（外装）

制作に関わった俳人たち

本絵巻の制作に関わった俳人の略歴等を簡単に確認しておく。以下、『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年十月）、『元禄時代俳人大観』（八木書店、平成二十三年六月～平成二十四年三月）、「和歌＆俳諧ライブラリー」（「日本文学Web図書館」株式会社古典ライブラリー、平成二十五年四月～）、加藤定彦・外村展子編『関東俳諧叢書』（青裳堂書店、平成六年一月～平成二十一年一月）、堀内宗完「堀内家の代々」（『日本の茶家』河原書店、昭和五十八年十二月）、『角川茶道大事典』（角川書店、平成二年五月）などを参照した。

まず、画を描いた「鶴翁」とは、堀内仙鶴（延宝三年～寛延元年）の別号。俳人としても活躍したが、表千家の茶家堀内家の初代として著名である。江戸の人で、堀内浄左の養子。俳諧は、元禄三年に沾徳に入門、宝永三年に京都に移住し、淡々とともに江戸の点取俳諧の風を移して、京都の三十一点者に数えられた。なお、移住は茶道を学ぶためで、表千家六代覚々斎原叟に入門して奥義をきわめた。仙鶴は書画にも長じ、門弟などの秀句に自ら絵を描いて「画及第」と称したという。

周竹（?～元文四年以前）は、江戸の医師で清水氏。俳諧は嵐雪門。師の没後に点印を譲られたが、老齢で引退を希望して吏登に譲ったとされる。

園女（寛文四年～享保十一年）は、伊勢国山田の神官秦師貞の娘、同地の医師で俳人の一有（渭川）の妻。貞享五年、伊勢に参宮した芭蕉を自宅に迎え、門人となった。元禄五年、夫とともに大坂へ移住したが、元禄七年に再び芭蕉を自宅に迎えている。元禄十六年、夫に死別した後、宝永二年に江戸に出て、眼科医をしながら俳人として活動、其角らと交流した。

秋色（寛文九年～享保十年）は、江戸の老舗菓子屋の娘で、小川氏かという。俳諧は其角門で、同門の寒玉の妻という。師の没後、沾洲・秋色・青流（敬雨）らと遺稿を編集して『類柑子』を出版、七回忌にも『石なとり』を刊行した。師の点印を譲られ、湖十（一世）に伝えた。秋色桜などの逸話が伝えられている。

敬雨（寛文三年～享保十八年）は、大坂の人で初めは惟中門。延宝九年『一夜庵建立縁起』が初出で、天和三年の惟中の歳旦にも名前が見える。その後、十数年の活動は不明だが、元禄七年に芭蕉と同座し歌仙を興行する。元禄十五年には江戸に下り、其角門に入る。以後、漂泊と庵住の生活を送り、享保十六年には『五色墨』に序文を寄せて、蕉風復興への気運を醸成した。

玉泉、夏葉、不吟、風洗、鬼丸、見草の六名の詳しい履歴は不明ながら、玉泉は『東のつと』（鶴銭編、享保二十一年刊）に入集、夏葉は『見かえり駒』（享保四年刊）を刊行、風洗は元禄三年刊の『其侭』（嵐雪編）・『秋津嶋』（団水編）以下の諸書に入集、鬼丸は『友すゞめ』（巽我編、仙鶴ら序、寛保三年刊）に入集することが確認できる。

おわりに

以上、新収品である俳画賛絵巻の内容を紹介した。はじめに記したように、制作時期、制作者、内容、いずれから見ても貴重で興味深い資料である。享保期の江戸で、露月や米仲たちによって絵俳書が多く刊行されたことを考えれば、おそらくこうした肉筆の俳画賛も同時期に多数制作されていたと想像される。しかし、現存する作品を目にする機会は、残念ながらそう多くはない。今後も、まだ埋もれている同様の資料の発見が望まれる。

（いとう　よしたか　湘北短期大学教授）

〈付記〉本稿はJSPS科研費26370259の助成を受けたものです。